

ミステリ読書案内

2024. 8. 2 発行元

第594号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。新刊の出るペースが鈍っているようで、本選びに悩む。同じ作家の同じシリーズものに偏らないようにと調整はしているつもりなのだが…。

新刊の出るスピードが鈍った？

前回も同じことを書いたけれども、5月、6月と進んでも新刊は例年ほど出ていない気がする。書店の新刊コーナーに本が並べられなくなって、表紙が正面に向くように提示してあるのを見ると、ミステリだけでなく、「文芸書」全体が落ち込んでいるように見受けられる。

文芸書と言えば、最近では雑誌の『群像』や『文学界』、『すばる』『小説新潮』なども置いている数が少なくなった。『文藝春秋』だけが山積

みなっている風景は違和感がある。小説全般の需要が少なくなっていると思うと悲しくなる。

新刊の平台を見ると雨穴の『変な家』シリーズの3冊と東野圭吾の『クスノキの女神』『ブラック・ショーマンと覚醒する女たち』などが並んでいる。地方の書店はそんな現状。都市の大型書店に行けば読み落としていた少数の本にも出会えるのかも知れないけれど。

夏に向けてこれからどんな本が出てくるのかを楽しみに…。「夏休み特集」みたいな…。

渡辺裕之『挽歌の雪』

5月に角川文庫から出た本。『冷たい狂犬シリーズ』の第六冊目ということになるのだろうか。最近の渡辺作品はシリーズの登場人物が重なり合うようになったので、何巻目というのが曖昧になってきた。影山夏樹がフランスから日本に戻って活躍を開始する内容。

出だしの舞台は冬の秋田県角館市近辺。公安調査庁の元上司でありながら、二重スパイのようなはたらきをしていた緒方が亡くなったので、その葬式に参加するのが表向きの理由。しかし、たちまちに尾行が開始され、敵からの攻撃が続く。「緒方の遺言」の謎をどう解くのが鍵。国防局の真木麗奈と行動を共にし、後半は台湾での攻防へと進んでいく。

大神晃『天狗屋敷の殺人』

6月に新潮文庫 nex. から出た本。「新潮ミステリー大賞」の候補作だったという。出だしに横溝正史の『犬神家の一族』について少しだけ触れられているが、地方の屋敷で起きる遺産を巡る争いの構図などは、古き良き時代のミステリが下敷きになっていることは間違いない。

十数年前の学生時代を振り返る形式でスタートする。貧乏学生の古賀鳴海が恋人の平澤翠の誘いで夏休みに彼女の実家である霊是家の天狗屋敷を訪ねることに。鳴海のアパート先の店主の樋山忍が探偵役としてついてくる流れに。折しも天狗屋敷では七年前に行方不明になった翠の祖父の春秋が死亡認定され、その遺言書が開示されることに。親族一同が集まって…。そこで連続殺人事件が発生していく。新人の意欲作といったところか。

福田悠『京都伏見の榎本文房具店』

5月に宝島社文庫から出た本。副題は『真実はインクに隠して』。福田悠の本を読むのは『前略、今日も事件が起きています』に続いて二冊目。落ち着いた書きっぷりで、安定した作風。

京都伏見で文房具店を開いていた祖母が亡くなったので急に店を継ぐことになった榎本史郎。東京で文房具バイヤーの仕事をしていたので、文房具のことは特別詳しい。ドイツの高級鉛筆、英国製の万年筆、インク、書道の墨などに関する専門知識が次々と展開されていく。残されていた文房具から、過去の出来事の謎を辿っていく流れに…。特殊な文房具に詰まった「人の思い」を想像していく作業である。

江戸川乱歩・芦辺拓『乱歩殺人事件一「悪霊」ふたたび』

1月にKADOKAWAから出た本。『悪霊』は江戸川乱歩が昭和8年から『新青年』に連載を開始した長編で、三回掲載した後中断した。続編を望む声が多かったのだが、未完のまま乱歩は亡くなってしまった。私が読んだところでは、話があまりにも大風呂敷に広がり過ぎたために、メイントリックおよび犯人以外の部分で收拾がつかなくなったように見受けられる。今回、芦辺拓が続編を構築してくれた。たくさんの研究者が乱歩作品の分析を試みているようで、その労苦も本作品には引き継がれている気がする。

文の書き手の元に犯罪記録の手記が届けられ、手記から事件を語らせる形式になっている。最初に登場するのが美しき未亡人が鍵のかかった土蔵の中で刺殺される事件。密室の中でどうやって…。傷口からの血の流れる方向が異様であり、奇妙な記号が書かれた紙が残されていた。続いて降霊会の出来事があり、遊園地の中の迷路館での殺人に繋がっていく。さて、芦辺の解答はどうか…。